

# 青森県内より採取したヤマブドウ系統の栽培特性

久保 隆・工藤秀樹\*・福士好文\*\*・菊池一郎\*\*・葛西 智\*\*・磯辺 慶\*\*\*  
(青森県農林総合研究センターりんご試験場県南果樹研究センター・\*青森県三八地域県民局地域農林水産部・  
\*\*青森県農林総合研究センターりんご試験場・\*\*\*青森県農林水産部りんご果樹課)

Characteristics of 5 selected line of wild grapes collected in Aomori Prefecture  
Takashi KUBO, Hideki KUDO\*, Yoshifumi FUKUSHI\*\*, Ichiro KIKUTI\*\*, Satoshi KASAI\*\* and Kei ISOBE\*\*\*  
(Kennan Fruit Tree Research Center, Apple Experiment Station, Aomori Prefectural Agriculture and Forestry  
Research Center・\*Sanpachi District Administration Office of the Department of Agriculture, Forestry and  
Fisheries Offices, Section for Agricultural Improvement and Expansion・\*\*Apple Experiment Station, Aomori  
Prefectural Agriculture and Forestry Research Center・\*\*\*Aomori Prefectural Apple and Fruits Division)

## 1 はじめに

青森県では休耕地や樹園地を有効活用する作目としてヤマブドウの導入が進み、2004年で約12haの栽培面積となっている。青森県林業試験場十和田支場では1991年から1998年にかけて県内各地に自生しているヤマブドウを採取し、主に収量性に注目して青森6号、8号、19号、25号、31号の5系統を選抜した。これら5系統について、県南果樹研究センターとりんご試験場のほ場で、挿し木自根苗を定植し、栽培特性を調査した。定植後7～9年経過し、各系統の栽培特性や収量性が明らかになったので、その結果を報告する。

## 2 試験方法

- (1) 県南果樹研究センター（五戸町）における栽培法
  - 1) 供試系統：青森6、8、19、25、31号の自根苗各2樹と雄株購入苗2樹、2001年4月定植。
  - 2) 栽植距離：2.5m×5m
  - 3) 仕立て法：垣根仕立てで、6アームニッフィン整枝の短梢剪定とした(図1)。
  - 4) 栽培管理：摘芽及び摘梢を行い、開花時には雄株の花粉を梵天を使って1房ずつ授粉した。8月上中旬に生育旺盛な結果枝を摘心した。収穫は糖度15%を目安とした。病害虫防除は、青森県ぶどう病害虫防除暦に準じた。
- (2) りんご試験場（黒石市）における栽培法
  - 1) 供試系統：青森6号2樹、19号1樹、8、25、31号は各3樹、雄株19号2樹1999年4月定植。
  - 2) 栽植距離：2.5m×5m
  - 3) 仕立て法：改良マンソン仕立てで、一文字両側整枝の長梢剪定とした(図2)。
  - 4) 栽培管理：摘梢を行い、開花前に第1花穂上位5葉で摘心し、更に副梢葉が8～9枚時に6枚で摘心した。その後発生した副梢は随時摘除した。人工授粉は毛羽たきにより行った。病害虫防除は、青森県ぶどう病害虫防除暦に準じた。
- (3) 調査項目：生態、樹の特性、生育、収量、果実品質

## 3 試験結果及び考察

- (1) 開花時期  
県南果樹研究センターにおける開花時期は、各系統とも6月上旬～中旬で、系統により1～2日程度の早晚が認められた。雄株の開花時期はほぼ同時期であった(表1)。りんご試験場における開花時期は、各系統とも県南果樹研究センターより4～6日早かった(データ省略)。なお、各系統の開花時期はキャンベル・アーリーとスチューベンに比べると、15～20日ほど早かった。
- (2) 樹の特性、生育及び収量と果実品質
  - 1) 県南果樹研究センターにおける試験結果  
各系統の特性概要は以下のとおりであった。
    - a. 青森6号

樹勢はやや強く、新梢の伸びが旺盛であり、収穫時期は10月上旬であった(以下特性表省略)。10a当たり収量は約680kgであり、果房重は約50gで、1粒重は約1.3gであった(表2)。果皮色は紫黒で、着粒の粗密は中程度であった(図4)。

### b. 青森8号

樹勢はやや強く、新梢の伸びが旺盛であり、収穫時期は10月上旬～中旬であった。10a当たり収量は約660kgであり、果房重は約70g、1粒重は約1.4gで、果房重と1粒重は青森系統の中で最も重かった(表2)。果皮色は紫黒、着粒の粗密は密であった(図4)。

### c. 青森19号

樹勢はやや強く、新梢の伸びが旺盛であり、収穫時期は10月上旬であった。10a当たり収量は約720kgであり、果房重は約60gで、1粒重は約1.2gであった(表2)。果皮色は紫黒で、着粒の粗密は中程度であった(図4)。

### d. 青森25号

樹勢は強く、新梢の伸びが旺盛であり、花穂の軸長が長い特徴が認められた。花穂が大きいため樹勢を適切に維持できれば着粒の多い房ができるものと推察された。収穫時期は10月上旬で、着粒の粗密は粗であり、果房重は約30gと軽く、10a当たり収量は約440kgと少なく、果皮色は紫黒で、1粒重は約1.0gと他系統に比べて軽かった(表2、図4)。

### e. 青森31号

樹勢はやや弱く、他系統に比べて新梢の伸びが短く、1樹当たりの着房数は、他系統に比べてやや少なかった。収穫時期は10月中旬で、青森系統の中では最も遅かった。10a当たり収量は約640kgであり、果房重は約60g、1粒重は約1.3gで、果皮色は紫黒で、着粒は密であった(表2、図4)。糖度は他系統よりやや低かった。

### f. 糖度、酸度の推移

2005年9月下旬以降の各系統の糖度と酸度の推移では、10月上旬に糖度15%に達した(データ省略)。また、青森8号及び他系統とも10月中旬以降は、糖度の増加や酸の低下が緩慢となった(図3)。

## 2) りんご試験場における試験結果

青森8号及び25号は果房重が重く、収量も多かった(表3)。各系統の1樹当たり果房数は60～70房であり、県南果樹研究センターの140～180房の約半数であったが(データ省略)、果房重は2.4～4.8倍となった。このように果房重が大きくなった要因として、長梢剪定で開花前の摘心処理を行ったためと推察される。

## 4 まとめ

青森8号は、栽培法の異なる県南果樹研究センターとりんご試験場ともに、結実が良好で果房重が重く、収量も多いので、更に栽培法の改善をすることにより、多収が期待できる優良系統と思われる。今後、加工適性や各種機能性成分の多少等を検討する必要がある。

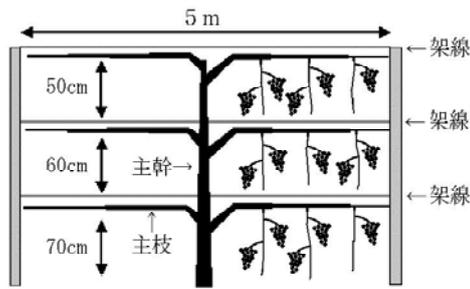


図1 垣根仕立て 6アームニッフィン整枝短梢剪定

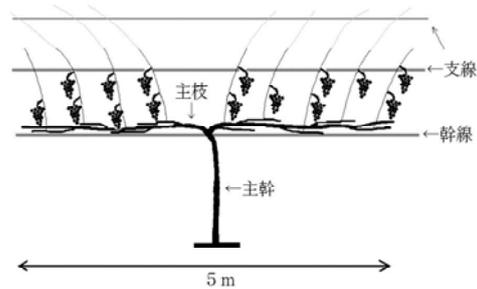


図2 改良マンソン仕立て 一文字両側整枝長梢剪定

表1 開花時期 (県南果樹研究センター)

系統	開花日	満開日	落花日
青森6号	6/7	6/10	6/14
青森8号	6/7	6/10	6/14
青森19号	6/7	6/9	6/13
青森25号	6/6	6/9	6/13
青森31号	6/8	6/11	6/15
雄株	6/6	6/8	6/15

注) 2004~2006年の平均。

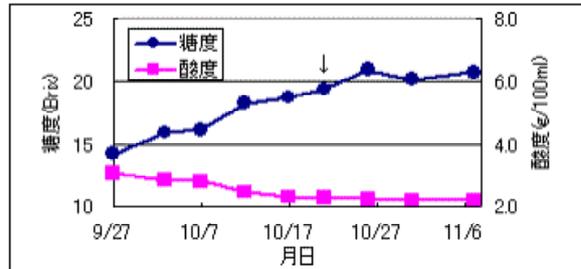


図3 青森8号の糖度、酸度の推移 (2005年 県南果樹研究センター) 注) ↓は収穫

表2 県南果樹研究センターにおける収量と果実品質

系統	収量 (kg/10a)	果房重 (g)	1粒重 (g)	糖度 (Brix)	酸度 (g/100ml)
青森6号	681	53	1.3	18.5	3.16
青森8号	657	72	1.4	17.9	2.47
青森19号	718	57	1.2	18.7	2.69
青森25号	441	33	1.0	18.3	2.70
青森31号	644	59	1.3	16.5	3.06

注) 2004~2006年の平均。

表3 りんご試験場における収量と果実品質

系統	収量 (kg/10a)	果房重 (g)	1粒重 (g)	糖度 (Brix)	酸度 (g/100ml)
青森6号	394 (504)	126	1.6	17.7	3.09
青森8号	866 (1028)	196	1.8	16.9	2.24
青森19号	456 (496)	150	1.5	15.3	2.46
青森25号	758 (928)	159	1.4	18.1	2.66
青森31号	470 (596)	171	1.7	16.2	2.83

注) 1 2004~2006年 (19号は2004、2005年) の平均。

2 2005年は降雨が続き人工授粉未実施。収量の () 内数値は2004、2006年の平均。

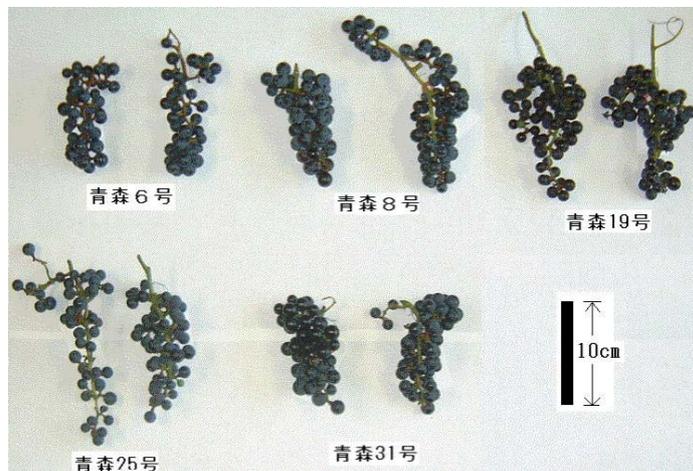


図4 収穫時の平均的な果房 (2005年 県南果樹研究センター)

